

愛知医科大学 学報



学生一人ひとりに授与された
Student Doctorのワッペン

平成30年度医学部白衣式挙行
(関連記事8頁)

＝ 第152号 ＝

2018. 10月

愛知県長久手市岩作雁又1番地1
〒480-1195

学校法人 愛知医科大学

愛知医科大学ホームページアドレス
www.aichi-med-u.ac.jp

■ 主な目次 ■

平成30年度総合防災訓練実施	2
平成31年度予算編成方針	3
平成31年度採用事務職員内定式挙行	6
平成30年度医学部白衣式挙行	8
医学部地域包括ケア実習体験記	10
海外研修派遣研修記	25
SMILE ～スマイル～	26
教育・研究最前線	27

平成30年度総合防災訓練実施

学校法人愛知医科大学消防計画第76条に基づき、平成30年10月18日（木）に教職員、学生を始め、近隣の医療機関及び尾三消防本部など関係機関を含む約1,000人の参加協力を得て、平成30年度総合防災訓練を実施しました。

訓練想定としては、午後1時30分に南海トラフ地震でマグニチュード9.0、長久手市で震度6強の地震を観測し、病院機能は一部麻痺しているものの、患者受け入れは行うことを想定し行われました。

訓練種別としては、全職員を対象とした本部共通訓練と個別訓練参加者を対象とした部門個別訓練に区別し実施されました。本部共通訓練では、各部署から職員参集状況報告書、被害状況報告書、入院患者状況報告書等の提出及び安否確認を行いました。

医学部災害対策室の個別訓練では、尾三消防本部より講師をお招きし、今夏に発生した西日本豪雨について講演して頂きました。また、スモークマシーンを使用しての煙体験、エア担架を使用した患者搬送訓練、水消火器を使った初期消火模擬訓練を体験し、有意義な実地訓練ができたと思います。

看護学部災害対策室の個別訓練では、今年初めて、看護学部1・2年生を対象にした災害を想定しながらのシミュレーションゲームに取り組み、併せて、ディスカッションを行いました。この訓練は、より実践に近いシチュエーションを想定したものとなっており、楽しみながらも現実に則した訓練となりました。

法人本部災害対策室では、施設被害状況調査及び報告から始まり、初期消火訓練、患者搬送訓練等を行い、災害備蓄品の搬送訓練も併せて実施しました。その一部を試味したこともあり、備蓄品に対する関心が更に高まりました。

病院災害対策室では、事業継続計画BCP（Business continuity planning）に基づき部署毎で大規模地震の発生を想定したシナリオを作成し、これに沿って各現場にて訓練を行いました。病院でのBCP訓練は、来年度以降も継続して行う予定です。

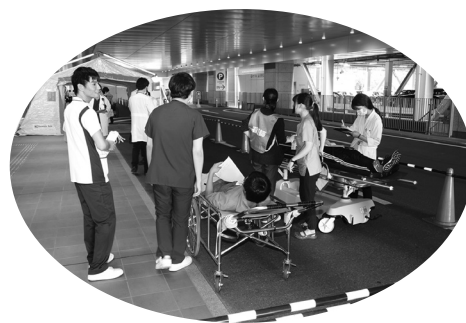
訓練を締めくくる検証会では、多くの本部員から様々なご意見が挙げられ、新たな課題も見つかりました。問題点を解決し、いざという時に役立つ訓練としていくため、今後もより一層実効性のある訓練の実施に努めてまいります。



災害対策本部



病院対策本部



平成31年度予算編成方針

30年続いた平成の時代を締めくくり新たな時代に踏み出すにあたり、眼を上げて将来を見渡すと、2030年頃には第4次産業革命ともいわれるIOTやビッグデータ、人工知能等を始めとする技術革新が一層進展しており、そこには狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続く、人類史上5番目の新しい社会であるSociety5.0の到来が予想されています。この社会では、人工知能やロボット等により日本の労働人口の49%に当たる職業が代替可能になると言われており、また、この超スマート社会が求める人材は、産業・社会におけるイノベーションを可能とする力量を持っていなければなりません。日本の教育に関する基本的な重要施策を担う中央教育審議会では、こういった前提のもと、高等教育に関する将来構想を展開しています。

また、「人生100年時代」を見据えた経済社会の在り方も構想されています。健康寿命が世界一の長寿社会を迎え、2007年に日本で生まれた子供は107歳まで生きる確率が50%あるとの試算も示されており、55歳から64歳までの就業率も諸外国の中で高い水準にあります。その一方で18歳人口は、1966年の249万人をピークに第二次ベビーブームの1992年までの26年間で44万人減少、更にその後の25年間で85万人減少し2017年には120万人となりました。極めて深刻な状況ですが、2018年問題はまだ入口であって、今後出生数が劇的に復活することはないと見込まれています。2020年には女性の2人に1人が50歳以上となり、2024年には3人に1人が65歳以上、2033年には全国の住宅の3戸に1戸が空き家となるといった予測もあるところです。

現在、本学が立地する長久手市及び隣接する瀬戸市、尾張旭市を合わせた人口は、27万人弱です。この地域に複数の大学、病院が存在しています。国は、2025年以降の少子高齢化と人口減少社会に備えて地域包括ケアシステムの構築及び地域医療構想の実現を目指しながら、病院の再編統合に向かおうとしています。本当に厳しい時代が目前に迫っています。先進工業国の中で最も債務の多い日本にとって、社会保障費（医療費、年金等）の増加が、財政圧迫の大きな要因となっており、医療費が歳出削減のターゲットから外れることは考えられません。

こうして将来を見渡し周囲に眼をやると、本学のとる道として浮かびあがるのは教育力を高め、本学に来なければ得られないものを創り出す、地域に何が必要なのか、国の動向はどうなのか、しっかりと足元を固め、先を見据えた持続可能な運営を行っていける基盤造りに注力しなければなりません。

私立医科大学は学校法人としての私立学校法と、高等教育機関の大学としての学校教育法、更に医療法と三つの法的枠組みで運営されており、経営と教学の密接不可分の関係をどのように調整するかという課題を構造的に抱えています。現実的に、経営判断には教学要素を含まざるを得ないし、教学の判断に経営の視点が介在するこ

ととなります。まずは、入口から出口までの一貫した、面倒見の良い、学生を鍛え育てる教育を行い、医療人として送り出す。患者さんからは、本院にかかって良かった、更に本院のネットワークがあつて良かったと言われるよう努力しなくてはなりません。

先の理事会・評議員会で承認された中・長期の財政計画では、2019年から2023年の5年間で医療情報システムの更新、新病院で整備した医療機器の更新及びキャンパス内既設建物の保全等大型設備投資を行った上で、2035年には、事業収支差額を名実ともに黒字化することと、支払資金の蓄積の加速を見込んでいます。その成否を握る大切な来年度予算は全学で危機感を共有し、オール愛知医科大学で編成に取り組まねばなりません。

平成31年度予算編成は、資金収支予算ベースでは経済変動の影響を柔軟に受け止めるとともに、いざというときの瞬発力となる繰越支払資金の具体的な目標金額を32億円とし、事業活動収支予算ベースでは、新規減価償却費の段階的解消分を除き、黒字予算2億円以上の確保を図ることとします。

上記の考えを具体の予算に反映するため、各編成単位においては中長期的な観点に立った次の「重点事業の目的」に合致した計画立案を求めることとし、定量的な成果が見込める事業を優先します。

- 1 教育機関としての成果が期待できる事業
- 2 医学教育分野別評価受審に係る事業
- 3 私立大学等改革総合支援事業対策
- 4 研究支援体制の強化に係る事業
- 5 病院の機能活性化推進事業
- 6 医療収入・その他の増収策の立案
- 7 関連病院に関する事業
- 8 医療情報システムの更新事業
- 9 省エネルギー対策の推進事業
- ☆ 創立50周年記念事業

☆ 創立50周年を迎えるにあたり、更なる発展のための施策、寄付募集事業及び寄付文化の醸成

2019年10月の消費税率10%への引き上げが予定通り実施される見込みとなりました。耐久消費財の消費者負担の軽減、税率を8%に据え置く軽減税率、更に様々な経過措置等これから明らかになる景気対策に遅滞なく対応することにより節税しなくてはなりません。

私立医科大学の消費税増税による社会保険診療報酬に占める控除対象外消費税、いわゆる「損税」は、1大学当り22億3,300万円、4%（平成28年度）と言われており、これを本学に当てはめると13億円弱と試算されることです。この制度の見直しを待つのではなく、これまでの商慣習を見直すことも含めた積極的な対策を検討し、その上で必要となる経費については予算措置を検討することとします。

わくわく体験リニモツアーズ 「“コードブルー”の世界 救急医療について学び、 考えてみよう！」開催

東部丘陵線（リニモ）の沿線施設の魅力を満喫し、学び楽しむイベント「わくわく体験リニモツアーズ2018」（東部丘陵線推進協議会主催）が、近隣に住む小学生の児童を対象に開催されました。

本学においても、平成30年8月21日（火）、22日（水）の2日間で「“コードブルー”の世界 救急医療について学び、考えてみよう！」と題した体験講座を開催し、多くの児童及びご父兄にご参加頂きました。

体験講座では、ドクターヘリの見学会、ドクターヘリに関する講演会、質疑応答が行われましたが、幸いにも全日程でドクターヘリの見学会を実施することができ、参加者は機体の迫力を間近で感じていました。

講演会では、本院のフライトドクター及びフライトナースによる講演がクイズ形式で行われ、ドクターヘリや仕事内容について説明があり、参加者は皆、普段聞けない医療現場の話やドクターヘリの話について熱心に耳を傾けていました。2日目には、講演会の最中に出勤要請が入り、実際の緊急出動の様子を実感して頂きました。

最後には、参加者全員にドクターヘリ（本学オリジナル）の特製ピンバッジを配布し、体験講座は盛況のうちに終了しました。



ドクターヘリ見学会



講演会

平成30年度愛知医科大学公開講座終了

平成30年9月1日（土）・8日（土）・15日（土）・22日（土）の計4回にわたり開催された平成30年度愛知医科大学公開講座が終了しました。

今年度の公開講座は、身近な病気の予防法や治療方法などについて学んで頂くため「知って得する最新医療」をテーマとして開催し、開催期間中は、近隣住民の方を始め、4日間で延べ647名の方々にご参加頂きました。

また、4日間全てに出席頂いた85名の方々には、最終日となる22日（土）の講座終了後の閉講式において、それぞれ修了証書が授与されました。

本学では、今後も地域の方々の健康に役立つ公開講座を企画・運営していきますので、多くの方のご参加をお待ちしております。

長久手市大学連携推進ビジョン4U 「学生まちづくりののろしをあげろ！のろし祭」でAEDの使用法の指導者に！

本学は、長久手市と包括連携協定を締結し、同市と連携して様々な取り組みを行っています。その一環として、長久手市大学連携基本計画「長久手市大学連携推進ビジョン4U」（大学連携）が策定され、長久手市内に位置する4大学（本学、愛知県立大学、愛知県立芸術大学、愛知淑徳大学）の連携事業を実施しています。

平成30年9月29日（土）にイオンモール長久手において開催された「ながくて隣人まつり」では、大学連携の事業として「学生まちづくりののろしをあげろ！のろし祭」と題した企画が実施され、4大学の各学生グループが参加し、各種の発表を行いました。

本学からは、医学部・看護学部学生を構成員とする

「AMULET」が、他大学の学生や市民にAEDの使用法を中心とした初歩的な救命処置指導の企画を行いました。

本学の学生がシミュレーターを用いてAEDの使用法や胸骨圧迫の方法などを説明すると、説明を受けた学生や市民の方々は、学生の熱心な指導に、皆一様に高い関心を持って身に付けようとされている様子で、好評を博す企画となりました。

今後も大学連携として様々な取り組みが予定されており、本学学生も積極的に参加することとなっています。

地域における本学学生の活躍にご期待ください。

科学研究費助成事業応募方法等説明会開催

平成30年9月12日（水）・14日（金）の2日間、大学本館201講義室において、科学研究費助成事業応募予定者を対象とした平成31年度科学研究費助成事業（科研費）応募方法等説明会が開催され、84名の参加がありました。

【写真】

この説明会は、本学における研究者の支援を行い科研費の申請・採択件数を増加させ、併せて科研費制度への理解を深めることを目的として毎年開催しているものです。

説明会では、研究創出支援センターの吉川和宏特務教授（9月12日（水））、鈴木進准教授（9月14日（金））から、申請書作成のコツなど有益な情報の講義が行われ、併せて総務部研究支援課の加藤広悟主事からも、科研費の申請方法や事務的な注意点について説明がありました。

説明会終了後には、出席した研究者から応募等に関する



多くの質問・相談が寄せられるなど、大変意義あるものとなりました。

本学では、今後も研究活動の一層の活性化と科研費を始めとする競争的資金の獲得を推進していきます。

科学研究費助成事業獲得支援等を目的としたセミナー開催

平成30年9月26日（水）大学本館201講義室において、学内研究者向けの科学研究費助成事業（科研費）獲得支援等を目的としたセミナーが開催され、68名の参加がありました。

このセミナーは、久留米大学分子生命科学研究科教授の児島将康氏をお招きし、採択される申請書を作成するためのコツを中心に、科研費申請書作成上の注意点、申請書様式の変更への対応策などについて講演して頂きました。

また、児島先生は著名な研究者であるため、本セミナーと併せて同氏の研究分野に関する「研究セミナー」も行われ、多くの研究者や医学部学生が熱心に聴講しました。

終了後には、研究者から応募等に関する多くの質問・相談が寄せられ、活発な討論が行われるなど大変意義あるものとなりました。

平成31年度採用事務職員内定式挙行

平成30年10月1日（月）午後3時から大学本館711特別講義室において、平成31年度採用事務職員内定式が挙行されました。

式では、内定者7名に内定証書が授与された後、島田孝一法人本部長から「新しい時代への飛躍の舞台がすべてそろったところで皆さんをお迎えできるということです。健康に気を付け、学業を疎かにすることなく、コンディションを最高に整えた皆さんと再会の日を迎えたいと願っています。」とあいさつがありました。

続いて、内定者を代表して堀田百合佳さんから「一日でも早く仕事を身に付け、愛知医科大学の力になれるよう精進していく所存です。至らぬ点も多く、お叱りを受けることもあるとは思いますが、ご指導ご鞭撻の程よろしく申し上げます。」と答辞が述べられ、午後3時30分ごろ式は終了しました。



内定者と記念撮影

教授を対象としたSD実施

大学運営に必要な知識・技能の習得、能力・資質の向上を目的としたSD（スタッフ・ディベロップメント）の対象に、「教授等の教員や学長等の大学執行部」が含まれていることを受け、平成30年8月23日（木）午後5時30分から大学本館201講義室において、教授を対象としたSDを開催し、医学部教授33名、看護学部教授7名の計40名が出席されました。

今回は、成功哲学の名著『7つの習慣』の内容を、人材育成プログラムとして提供しているフランクリン・コヴィー・ジャパンから、竹村富士徳副社長をお招きし、個人そして人間関係のあり方の原理原則についてご講演頂きました。【写真】

参加者からは、「自分の眼鏡をはずして聴くことを大切にしていきたいと思います。」「Proactiveと時間管理を実行してみたい。」「リーダーシップとマネジメントの区別、これを意識しながら対応してみたい。」といったコメントがありました。



「7つの習慣」の概要

パラダイム

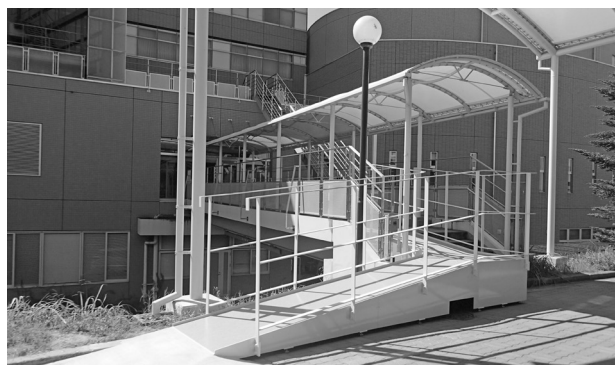
- 第1の習慣：主体性を発揮する
- 第2の習慣：目的を持って始める
- 第3の習慣：重要事項を優先する
- 第4の習慣：Win-Winを考える
- 第5の習慣：理解してから理解される
- 第6の習慣：相乗効果を発揮する
- 第7の習慣：刃を研ぐ

看護学部棟連絡通路のスロープ完成

これまで大学本館と看護学部棟の連絡通路は、建物の高低差の関係から階段で接続されており、行事の際には、階段で荷物を担ぎ上げる必要があるなど、大変難渋しておりました。

このたび、この連絡通路に念願のスロープが完成し、平成30年9月18日（火）開通式が行われました。

このスロープの完成によって、荷物運搬以外にも急病人を乗せた車いすが安全に移動できるようになるなど、看護学部にとって大変うれしいニュースになりました。



完成したスロープ

平成31年度大学院医学研究科入学試験 第69回論文博士外国語試験実施

平成30年10月5日（金）大学本館711特別講義室において、大学院医学研究科入学試験及び第69回論文博士外国語試験が行われました。合格者数は、大学院医学研究科入学試験が18名、論文博士外国語試験が2名となり、入学定員に満たないことから第2次募集を予定しています。

これまで社会人入学制度や学納金免除制度の拡充など

を行い、大学院教育を受けやすい環境を整えてきましたので、研究意欲の高い方が多数応募されることを期待しています。

大学院医学研究科入学試験（第2次募集）及び第70回論文博士外国語試験は、平成31年2月8日（金）に実施予定です。

平成31年度大学院看護学研究科入学試験実施

平成30年9月5日（水）大学院看護学研究科入学試験が行われました。合格者数は、修士論文コースが3名、高度実践看護師（専門看護師[CNS]）コースが2名、高度実践看護師（診療看護師）コースが7名となり、入学定員に満たないことから第2次募集を予定しています。

本研究科では、これまで医療等の現場で活躍されている方々が、退職したり休職したりすることなく学べるよ

う、平日の夜間や土曜日などにも講義、研究指導等を行っています。更に、勤務や育児などの事情により標準修業年限での履修が困難な学生を対象とした「長期履修制度」を導入し、社会人がより学びやすい教育環境を整えています。（高度実践看護師[診療看護師]コースを除く。）

大学院看護学研究科入学試験（第2次）は、平成31年2月7日（木）に実施予定です。

医学教育分野別評価受審に向けた第3回・第4回FD実施

本学医学部では、本年6月に自己点検評価書の領域2「教育プログラム」と領域7「プログラム評価」についてのFDが実施され、自己点検評価書の作成方法に留まらず、これからの本学での医学教育改革をどのように進めていけばよいのか等について非常に多くの学びが得られました。

今回も前回FDに引き続いて、分野別評価の審査に精通されている講師の先生をお招きして、前回とは異なる領域についての意見交換会を医学部FDとして2回実施しました。

第3回FDは、平成30年10月2日（火）大学本館201講義室において開催され、講師として国際医療福祉大学の北村聖医学部長（前・東京大学大学院医学系研究科附属医学教育国際研究センター教授）をお招きしました。北村先生には、領域3「学生の評価」と領域6「教育資源」についてご意見を頂き、当日の講演では日本と西欧の医学教育について触れられ、どちらが良くどちらが悪いということではなく、進化の過程が大きく異なる点や日本の文化を反映し、130年以上もの間、西欧の医学教育から隔離されてきた1870年代以降の持続的な改革がないことを強調され、参加した教員は大きなインパクトを受け

ました。

また、現在、本学で取り組んでいる医学教育分野別評価については、アウトカム基盤型教育・臨床実習の充実（診療参加型の期間・卒業時のコンピテンシー保証）、卒業時や進級時の評価（医師国家試験とは無関係）、医学教育の質の継続的向上が重要であると結ばれました。

第4回FDは、平成30年10月11日（木）大学本館201講義室において開催され、講師には第2回FDでお招きした新潟大学総合医学教育センターの鈴木利哉教授と領域4「学生」と領域5「教員」について意見交換しました。

当日はこの2領域に留まらず、全体を通してご指導を頂きました。全体を見ると執筆内容が統一されていない箇所があることや執筆者全員がPDCAサイクルを念頭において記述する必要があることなど、貴重なご意見を頂きました。

今後は、来年9月の受審に向けて教職員が一丸となって、引き続き準備を進めていくこととなりますが、併せて医学教育の改革は立ち止まることなく、継続していかなければならないことを参加者全員が理解した貴重な機会となりました。



第3回FD



第4回FD

平成30年度医学部白衣式挙行

平成30年10月27日（土）午前10時から大学本館たちばなホールにおいて、平成30年度医学部白衣式が挙行されました。

白衣式では、共用試験CBT・OSCEに合格し、臨床実習への参加及び後期課程への進級が認められた医学部4学年次生に対して「Student Doctor」の称号を授与します。学生は新しい実習衣を身に付け白衣式に臨みました。

本式では初めに、若槻明彦医学部長から、臨床実習に臨む者としての心構えについて話があり、代表者へStudent Doctor証書が授与されました。引き続き、石橋宏之教務部長を始め、6名の臨床医学系教授から学生一人ひとりにStudent Doctorのワッペンが授与されました。

次いで、佐藤啓二学長、羽生田正行病院長、井上里恵看護部長に加え、愛知医科大学同窓会愛橋会から小出龍郎理事（前会長）、昨年度本学を卒業し研修医1年目の柴田俊医師からも激励のあいさつがあり、終わりに、学生代表の大石紘之さんが宣誓文を読み上げ、全員が復唱するという形で学生宣誓が行われました。この宣誓文は、

これから臨床実習に臨むに当たっての心構えなどを事前に学生自身がグループワークを行い話し合っ作成したものであり、自分たちで考え、言葉にすることで、自らの臨床実習への意識付けや行動規範とするものです。

また、白衣式終了後、たちばなホール壇上において記念撮影をし、その後、レストランオレンジで開催された教員との懇親会では、これから始まる臨床実習に向けて、実際の現場の声を聞くこともでき、学生それぞれが決意を新たに次のステップを踏み出しました。



学生代表の大石さんによる宣誓

平成30年度第1回・第2回大学院医学研究科FD特別講義の開催

平成28年度から大学院医学研究科FD（ファカルティ・ディベロップメント）として特別講義を開催しており、今年度も2回実施しました。

第1回目は、平成30年9月28日（金）大学本館201講義室において開催され、講師として産業医科大学医学部第三内科学の原田大教授をお招きしました。原田教授には、「銅代謝異常とそれに対するストレス対応」をテーマとして講演して頂きました。

第2回目は、平成30年10月17日（水）大学本館301講

義室において開催され、講師として学習院女子大学国際文化交流学部日本文化学科の澤田匡人准教授をお招きしました。澤田准教授には、「妬みと羨みをめぐる心の科学」をテーマとして講演して頂きました。

当日は、大学院医学研究科の多くの担当教員が参加し、今後の研究・教育の質の向上につながるものとなりました。医学研究科では、引き続きFDの特別講義を開催し、更に授業内容・方法を改善し向上させて参ります。

国際交流



アメリカ南イリノイ大学医学部教員来学

本学医学部では、平成17年3月からSIU（南イリノイ大学）との学術国際交流を行っており、教員の招へいや相互に学生の派遣・受け入れを行っています。

例年本学からは、5学年次生を対象とした臨床実習に参加するコースと、3・4学年次生を対象としたSIU2年生カリキュラムを受講するコースの二つのコースへ学生を派遣しています。平成30年10月23日（火）、24日（水）の2日間にわたり、この学生の受入れに多大なご協力を頂いているSIUのLisabeth DiLalla先生（家庭地域医療学講座・教授）及びAnna T. Cianciolo先生（国際ジャーナル「Teaching and Learning in Medicine」編集長、医学教育講座 准教授）が来学され、本学の視察や学生・教員との交流を行いました。

今回の来学では、理事長、学長、医学部長への表敬訪問や来学された先生方による「Using Mentoring and Active Learning to Enhance Behavioral Sciences Learning」及び「Student Engagement at SIUSOM」について講演が行われました。SIUでは、先駆的な教育カリキュラムの開発と充実した医学教育システムの整備を重点的に行っており、この講演では、これらに関する知識や理解を深めるよい機会となりました。

また、SIUへ派遣予定である医学部5学年次生に対するケースプレゼンテーションの指導だけでなく、3・4学年次生に対しても、SIUで行われているPBL（問題立脚型



来学された先生方との記念撮影

学習）や医療英語の指導をして頂きました。指導後には、派遣学生との懇談会も行われ、学生にとっては、指導を受けた際の緊張感から解放され、積極的に先生方とコミュニケーションを図り、親睦を深めることができました。また、派遣に向けての新たな学習課題を形成できるよい機会となり、モチベーション向上へと繋がったようです。

このように、例年のSIU教員の来学は、両大学の相互交流の更なる発展に大いに役立っています。

医学部では今後も引き続き学術国際交流協定校等の開拓に努め、更に多くの学生に海外留学へのチャンスを与え、海外大学の学生の受入れを通して、学生が国際的な視野を広げる一助になるよう一層努力していきます。

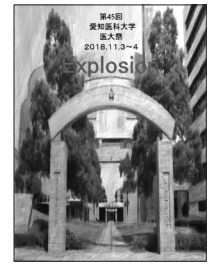
第45回 愛知医科大学医大祭「Explosion」

平成30年11月3日（土・祝）・4日（日）に今年度の医大祭が開催されます。

学生一人ひとりが壁を壊して、持っている個性を出してエネルギーに溢れ、地域の方達も楽しめるような医大祭にするため、今回の医大祭テーマを「Explosion」にしました。

普段は勉学に励み日々、良き医師・看護職者になるため努力をしている学生たちが年に一度のこの祭りで、個性という自己をあらゆる形で表現できる機会を作ること为目标に、企画を作っていきたいと思っています。

本学がより地域に根ざした医療を行えるようになるためにも、是非多くの地域の方々にも足を運んで頂き、楽しんで頂けたらと思っています。



【主なイベント紹介】

☆期間中開催

- ・模擬病院
（血圧測定、メタボリック健診、肌年齢測定等）
- ・模擬店（16店舗）
- ・HIAMU企画（薬膳、魚釣りゲーム等）

☆3日（土・祝）

- ・つるの剛士トークショー『シンプルでいこう』
- ・献血・骨髄バンク

・病院イベント

- （ハートフルコンサート、秋のふれあいコンサート）
- ・看護イベント（わくわく!!ちびっこ医師・看護師体験）
- ・学生運動会（フットサル大会、バスケットボール大会）

☆4日（日）

- ・リサイクルマーケット&スタンプラリー
- ・防災・減災セミナー
- ・学生運動会（ソフトボール大会、テニス大会）

平成30年度秋の交通安全講習会開催

平成30年10月16日（火）午後5時40分から大学本館205講義室において、名東警察署交通課長の藤井優警部を講師に迎え、医学部・看護学部の学生を対象とした交通安全講習会が実施され、46名の学生が参加しました。【写真】

始めにDVD「死角に潜む危険～事故事例に学ぶ危険予測・危険回避～」の鑑賞があり、内容としては、「車間距離を意識して取り、前方の視界を確保して走行すること」、「死角には車の構造上できる死角と他の車を作る死角があること」、「対向車や駐車車両等の陰には何か存在すると思ひ、危険を予測すること」、「自分の目で確認する事を忘れず十分な安全確認をすること」などの具体的な事例説明がありました。

続いて、講師から「道路標識ダイヤモンドマークは何か?」、「運転中に携帯電話で話をしていた時に白バイと目が合った。人はその時どういう行動を取るか?」等クイズを交えた講話があり、受講した学生は楽しく真剣に聴いている様子でした。



講師からは、「“隠す”それが人間心理。しかし隠すという行動が大変な状況に繋がってしまう。」、「もし事故を起こしてしまっても、絶対に逃げないこと。」を特に強調されました。

毎年春と秋に実施している当講習会を通じ、学生一人ひとりが交通安全に努めてくれることを期待します。

学生表彰について

平成30年8月5日（日）から8月20日（月）にかけて、三重大学医学部を主幹校として開催された第70回西日本医科学生総合体育大会において、医学部5学年次生の高橋周治さんが、陸上部門男子100mで優勝しました。また、医学部2学年次生の松村育弥さんが、水泳部門男子400m自由形及び200mバタフライの2種目で大会新記録を樹立し、優勝しました。団体の部では、ゴルフ部門男子が準優勝、バスケットボール部門女子が4位と健闘しました。

また、平成30年8月1日（水）から8月3日（金）にかけて愛知医科大学を主幹校として開催された第33回全日本医科学生アーチェリー競技大会において、医学部2学年次生の谷村香奈さんが、ハーフ部門女子で優勝しました。

これに伴い、10月31日（水）役員会議室において、高橋周治さん、松村育弥さん、谷村香奈さんに対し、他の学生の模範となったとして佐藤啓二学長から表彰状等の授与が行われました。



左から鈴木学生部長、若槻医学部長、谷村さん、松村さん、高橋さん、佐藤学長

今後も、文武両面で、表彰される学生が続くことを期待します。

医学部地域包括ケア実習体験記

医学部では、チーム医療の実際について理解することや様々な視点から患者ケアを実践すること、「地域社会への貢献」における地域包括ケアの実践に参加できることを目標に老人保健施設等において実習を行っています。

3日間（平成30年9月11日（火）～13日（木））の実習により、多くの学びを得た学生の体験記をご紹介します。

入所者を支える介護職員の力強さ

実習施設：愛厚ホーム瀬戸苑
3学年次生 富澤 春香

今回の実習で伺った愛厚ホーム瀬戸苑は、特別養護老人ホームでした。そのため、要介護3以上の高齢者が9割を占めており、数人を除き全ての人が認知症を患っていました。私が配属された東フロアは、施設の中でも自力で動き回れる人や会話のできる人が多く、そのため私は入所者が徘徊しないように面倒を見たり、コミュニケーションを取ったりしました。この三日間を通して印象的だったことは、二点あり、入所者の健康管理と一人ひとりに対する対応でした。

まず、入所者の健康管理に関して驚いたことは二つありました。一つ目として、水分補給を取ることを非常に重く受け止めていたことです。水分を摂る時間を午前と午後それぞれ3回以上設けていて、必ず全員に水分を摂取させていました。そして、一人ひとりがどれくらいの量を飲んだのか記録をしていました。また、誤嚥の恐れがある人に対しては、液体で摂取するのではなく、リングゼリーやお茶ゼリーといった、飲み込みやすいゼリー状にしていました。また、一人で飲めない人には、職員の方が付きっきりでスプーンを使い、飲ませたりしていました。

二つ目としては、食事介助の重要性です。東フロアは自力で食事ができる人が多かったので、食事介助を必要とする人は4人しかいませんでした。食事介助の必要な人は自分で動くこともできず、会話もできない人でした。そのため、誤嚥を防いだり、食べやすくしたりするために食事も離乳食のようにペースト状にしていました。しかし、会話ができなくても意思表示をできる人はおり、嫌いなものであったり、これ以上口にするにはできなくなると、手が出たり、叫んだりしていました。それでも、介護士の皆さんは驚いたりせず、大きな声で「これだけ食べてね。」「〇〇さん、あともう少しだから頑張つて。」と励ましながらか食べさせていました。

もう一つの印象的だったことは、入所されている方一人ひとりに対する対応です。入所されている方はいろいろな人が多く、車いすなしで自力に歩きまわる人や寝た

きりの人がいらっしゃいました。見た目や会話の流暢さから何も問題のないように見える人でも、認知症を患っていたりしました。入所されている方の中に99歳のおばあさんがいて、重い認知症を患っていたが、自力で歩き回れる人がいました。その人は、歌を聴いたり、歌ったりするのがとても好きでした。そのため、徘徊を防ぐために、歌を流したり、職員の方々はその人の傍で作業を行っていたりしました。また、どこへ行っても寝てしまう人に対しては、その人が好きな雑誌を読ませて常に寝ないようにしていました。これらのエピソードは一握りですが、職員の人は、入所者一人ひとりがどのような人であるかを把握し、対応方法を変えていることがとても印象的でした。

今回の実習を通して、自分の趣味がはっきりしており、社会性のある人ほど施設での生活を楽んでいるように見えました。一方で、特にすることを見出せない人は、社会性が低いように感じました。そのような人たちは、テレビを眺めているか、寝ることくらいしかすることがないように見えました。確かに絵手紙教室やカラオケ大会、喫茶などのイベントは日程に組み込まれていましたが、そのようなイベントに参加して楽しんでいる人たちは、社会性が強く前者のような人ばかりでした。そのため、社会性が低く、特にすることがないような人に対しては、洗濯物をたたませたり、体操をさせたりと何もしない時間をできるだけ少なくさせているように見えました。

高齢者が増える社会で、高齢者がQOLの高い余生を過ごせるためにも、老人ホームなどの施設は意義のあるものであると感じました。しかし、介護職員の人手は十分に足りているとは言えず、人手をフルに使い、入所している方の面倒を見ているようにも感じました。そのため、必ずしも職員の方は入所者一人ひとりとコミュニケーションを取ることができません。これらの点を踏まえると、職員の賃金の引上げや、介護職員が増えるような工夫を行っていく必要があるとも感じています。

看護学部体験講義開催

平成30年8月3日（金）に愛知県立天白高等学校から高校生16名（1～3年生）及び教員1名が来学されました。

体験講義では、精神看護学の琴喜田教授による「看護におけるコミュニケーション」をテーマとした模擬授業を真剣な眼差しで聴かれていました。その後、総合学術情報センター（図書館部門）を見学し、「ナイチンゲール直筆サイン入り図書」などに大変興味深そうにされており、また、看護学部実習室の雰囲気にもふれ、大学での学びに思いをはせている様子でした。

平成30年10月24日（水）には、愛知県立中村高等学校

から高校生36名（1年生）及び教員2名が来学されました。

施設見学では、間近で見るドクターヘリに圧倒されており、フライトナースに「どうしたらフライトナースになれるのですか。」「肩に背負う荷物は重たいですか。」など様々な質問があり、有意義な時間となりました。学食体験では、レストランオレンジでの昼食を楽しみ、その日の体験講義を終了しました。

このような体験を通して、看護師を志す高校生が一人でも多く育まれることを願っています。

看護学研究科特別講義開催

平成30年9月22日（土）午後1時30分から大学本館201講義室において、首都大学東京人間健康科学研究科看護科学領域教授の西村ユミ先生をお招きし、「看護実践を豊かにする現象学的研究の方法」というテーマで特別講義が開催されました。【写真】

講義では、看護場面の実践知に関するグループインタビューを通して、看護師の語りから、言葉にならない看護の営みを「言葉」として読み解いていくという視点について紹介して頂きました。看護師の志向性は常に患者や環境世界であり、ともすると自分たちがどうやっているのかなどに関心を向ける機会はないのが現状です。しかし、看護の営みをグループで語ることによって、共通の基盤が構成され、自分たちが抱いていた経験が、言葉として駆動されてくるのが分かりました。

「現象学的な視点」というとかなり難解なイメージがありますが、「何が起きているのか」と語り合うだけでも、自己の経験に意味を与えることとなります。看護実践の奥の深さを感じる有意義な機会となりました。

また、平成30年10月26日（金）午後6時30分から大学本館303講義室において、Studio Gift Hands代表取締役、東京大学先端科学技術研究センター人間支援工学分野特任研究員の三宅琢先生をお招きし、「人生100年時代、治す医療から治る医療へ」というテーマで特別講義が開催され、遅い時刻からの開始でしたが、75名の参加者がありました。【写真】

講義では、三宅先生が、眼科医としての診療に行き詰まりを感じ、産業医として活動する中で産業医+眼科医として活動軸が広がり、他人と違う自分の好きなことを見つけ、いかに個性を発揮するかが重要であるご自身の体験を交えながらお話しされました。

これからは人生100年時代となり、人工知能が人類を超え、何のために仕事をするのか、人生戦略を立てる時代が到来します。また、医者が病気を治すのではなく、患者が自らを治す医療の時代になると解説があり、視覚に訴えるスライドを用いて分かりやすくお話しして頂き、参加者の満足度の高い講演となりました。



世界患者安全の日開催

平成30年9月18日（火）に中央棟2階において、医療安全管理室の主催により「世界患者安全の日」のイベントが開催されました。【写真】

世界患者安全の日とは、今年9月13日・14日に開かれた閣僚級世界患者安全サミットにおいて、各国が連携して医療の質の向上に努めることを掲げた「東京宣言」のなかで、毎年9月17日に制定されたものです。

イベントテーマを「安全第一 私たちの安全宣言」とし、病院長、看護部長を始め、病院48部署の医療安全活動をポスター形式で展示しました。また、ポスターは安全宣言コンテストと称し、総数222票の投票を頂きました。その他、ノベルティーグッズや“気になることがあったら声にだそう”を呼びかけるSPEAK UPチラシの配布を行い、外来・入院患者さんに限らず、ご家族やご友



人など多くの方にお越し頂きました。

このイベントを通じて「当院の医療安全に対する取り組み」について知って頂く良い機会になりました。

病院公開講座&病院食の試食会開催

平成30年8月4日（土）中央棟2階において、近隣住民の方々を対象に、本院栄養部主催による公開講座及び病院食の試食会が開催されました。病院食の試食会は、今年で3回目の開催ですが、募集開始から1週間で定員一杯になるほどの人気の高いイベントです。

今年の公開講座は、「血糖値が気になっている人へ～今日から食事を変えてみる？そのきっかけに…～」をテーマに開催されましたが、血糖値は身近な健康診断等で測定する機会も多く、マスコミでも頻繁に取り上げられていることから、多くの方が関心を持ってお越し頂き、講演会終了後には沢山の質問が寄せられるなど、関心の高さが窺われました。

当日は、栄養部の森直治部長からあいさつがあり、その後の講演会では、糖尿病療養指導士である栄養部の戸田景子主任から食事の基本について講演が行われ、参加者は熱心に耳を傾けていました。血糖値が気になる人の食事の基本は、個々に合った適切なエネルギー量を守り、炭水化物を最初に食べないことを心がけることが大切であると強調されました。

その後、職員レストランに会場を移して、病院食の試食会が行われ、「鱈の味噌煮」や「野菜の和え物」、「南



あいさつする森部長



病院食の試食会

瓜の煮物」などを試食して頂きました。実施した試食会アンケートでは、味付けが適切だったとの回答が100%で、全体のアンケート結果からも半数以上の方が複数回の参加者であったことから、継続して食事について考える機会が提供できていることが実感でき、栄養部の職員全員が来年度以降も開催する楽しみや励みとなる結果になりました。

栄養部では、今後も患者さんに美味しいと言って頂ける病院食を提供して参ります。

小児科病棟で夏祭り・ハロウィンパーティー開催

平成30年8月23日（木）及び10月31日（水）の2日間にわたり8A病棟において、院内学級たんぼぼの恒例行事として、夏祭り及びハロウィンパーティーが開催されました。【写真】

本院の「院内学級（長久手市立長久手小学校たんぼぼ学級）」は、平成16年4月に開設され、教員が毎日常駐し、小児科医局や看護部の病棟スタッフとの密接な連携の下、健康上の配慮をしながら授業が行われており、児童が楽しく、居心地の良い場所になるようにと、子どもたちの興味・関心が高いものや体験を重視した活動など毎回工夫を凝らした行事が行われています。

今回行われた夏祭りやハロウィンでも、盆踊りや的当てゲーム、仮装グッズづくりなどの体験型のイベントが盛りだくさんです、参加した子どもたちは満面の笑みを



浮かべ、ご家族の方々とともに楽しい時間を過ごされました。

マネジメントラダー認定証交付式挙行

平成30年9月27日（木）病院長室において、平成30年度マネジメントラダーレベルⅣ（MIV）の認定証交付式が執り行われました。【写真】

平成28年度に看護管理者のラダー（マネジメントラダー）を導入し、MIVは「社会・看護の動向を捉え、発展的に看護管理を実践するとともに看護管理分野において指導的な役割ができる」として認定された師長です。また、MIVは2年毎の更新システムをとっており、この3名はたゆまない努力を重ね初めての更新者となりました。この認定式では羽生田病院長から認定証を受け取り「今後の更なる活躍に期待します。」と激励されました。

今後も看護管理者として、自らの発展的な管理実践を行うこと、マネジメントⅢの師長に対して人材育成に関わること、院内研修の講師としてジェネラリストの育成に関わることなど人材育成の更なる向上に尽力されることを期待しています。



MIVの皆さん

小林 美和師長（医療安全管理室）
坂田久美子師長（EICU）
石橋ひろ子師長（総合腎臓病センター）

鎮静実践セミナー・鎮静指導者養成コース開催

平成30年9月15日（土）本院において、日本医学シミュレーション学会（JAMS）主催、麻酔科学講座と医療安全管理室との共催で、鎮静実践セミナー／鎮静指導者養成コースが開催されました。【写真】

本コースは、JAMSが2012年から全国各地で開催しており、今回で75回目となりますが、本院では初めての開催となりました。処置や検査時の鎮静に関連する医療事故は世界中で報告されており、本院においても同じ状況ですが、これは、ほとんどの医療従事者が体系的に鎮静のトレーニングを受ける機会を得ぬまま、鎮静を行わないといけいない環境にいるからです。処置や検査の強さに応じて、鎮静を適切な深度に調節することは難しく、呼吸抑制などの重篤な合併症への対応もトレーニングをしていなければなりません。

当日は、鎮静実践セミナーに23名、鎮静指導者養成コースに4名が参加し、それぞれセミナーを修了しました。本院からは鎮静実践コースには医師5名、歯科医師1名、研修医2名、診療看護師3名が、指導者養成コースには医師3名がそれぞれ受講しました。



通常、処置・検査時における安全は鎮静が専門ではない医師、研修医、看護師によって保たれています。このセミナーをきっかけに鎮静を安全に行う文化が広まることを期待しています。

今後も定期的にセミナーを開催していきたいと考えておりますので、多くの皆さんの参加をお待ちしております。また、各科や各部署からの開催要望があればお応えしたいとも考えております。

集中治療領域の初期診療講習開催

平成30年8月18日（土）・19日（日）の2日間にわたり、一般社団法人集中治療医療安全協議会と医療安全管理室・麻酔科の共催で、Fundamental Critical Care Support（FCCS）コースが開催されました。【写真】

米国集中治療医学会が開発したFCCSは、集中治療を要する患者の初期対応について学ぶために最適のコースとして認識されており、米国のみならず世界中で広く開催されています。現在、中部地方では、本学でのみ開催されています。

今回、本学において5回目のコース開催となり、合計47名の受講生が修了しました。本学からは、医師2名、看護師5名の合計7名が受講して、講習を通して、知識と技術を修得しました。

患者の重症化を迅速に予見して、病態の増悪を最小限に留めて救命に結びつけるためには、エビデンスに基づ



いた医療をチームとして実践する必要があります。世界標準の医療を提供できる医療従事者を育成することで、医療安全の実現と患者の予後改善が期待できるため、多くの職員が受講されることを期待しています。

若手事務職員キャリアデザインセミナー開催

「人生100年時代」を踏まえた社会変化の中で、キャリアデザインの重要性が高まっていることを踏まえ、平成30年8月7日（火）午後4時から立石プラザ交流ラウンジにおいて、若手事務職員を対象にキャリアデザインセミナーを実施しました。【写真】

平成30年度重点事業「私学研修生派遣」により、4月から日本私立学校振興・共済事業団で1年間の研修プログラムに参加している資金・出納室の大西加珠季主事を講師とし、私学事業団での研修を通して得られている経験、感じていること等を共有してもらうことで、本学職員としての視野を広げ、キャリア形成に対する意識を高めてもらいました。

受講者からは、「愛知医大の発展につながる財務・法律等の知識も学んでいきたい。」「客観的に見ることで、



私立大学の中の本学の立ち位置を見つめ直すことができ良いと感じた。」といった感想がありました。

目標管理評価者研修実施

人材育成を目的に導入している目標管理制度において、評価者には、職員一人ひとりのモチベーションを高めて成果を上げていく重要な役割が期待されていることから、継続的に評価者の研修に取り組んでいます。

今回は、平成30年8月22日（水）大学本館711特別講義室において、午前・午後の2部制で、株式会社インソースから服部正信氏を講師に迎え、制度の意義を再確認して役割意識を高めることや、面談の基本フローの確認、部下へのフィードバックのポイント等を、グループワーク、ロールプレイを交えた研修を実施しました。【写真】

参加者からは、「中間面談前に受講でき、しっかりと準備をして面談に臨みます。」「今まで自分が行っていなかった方法を取り入れていきます。」「評価者として、



部下を適切に評価し、育成していきたい。」といったコメントがありました。

新規採用事務職員半年フォロー研修実施

事務部門の新規採用事務職員を対象に、配属後半年を一つの区切りとしたフォロー研修を平成30年9月14日（金）7号館（医心館）多目的ホールにおいて実施しました。【写真】

初めに、半年間のモチベーションの変化をふりかえりながら、業務での出来事を整理してもらいました。続いて、KPTワークを通し、「できるようになったこと」、「まだできないこと」の確認と、「挑戦したいこと・業務の改善案」を考えてもらうことで、自分たちの成長を感じつつ、今後やるべきことを明確にし、モチベーションの向上に繋げる時間としました。

参加者からは、「もっと広い視野で物事を見ていくべきだと感じた。また、目標を持って仕事に臨む大切さを再認識できた。」「今後も業務分析により状況を整理し、改善点を見つけ目標達成のために行動に移していき



い。」といった感想がありました。

本学では、大学の将来を担う人材を育成するためのSDに今後も継続的に取り組んでいく予定です。

「財務研修」実施

学校法人を取り巻く経営環境の厳しさが増す中、経営管理の重要性が高まっていることを踏まえ、事務職員の経営管理能力向上を目的に「財務研修」を実施しました。

【写真】

「本学決算書の読み方と、財務課題の理解」をテーマに階層別で実施し、主査・主任向けの研修では、個人ワークを取り入れて、より深い理解を促しました。主事向けの研修では、ポイントとなる会計用語の解説により時間をかけ、財務課題を理解するための基礎知識を習得してもらいました。

受講者からは、「企業会計については知っていたが、学校会計について勉強する機会が中々なく、予算や決算を作成する業務とのつながりが見えてよかった。」「学報などで見ていた財務諸表の読み方を初めて詳しく教えてもらい、今後は細かい数字も確認し、本学の財務状況に関心をもっていきたい。」といった感想がありました。



〈財務研修『本学決算書の読み方と、財務課題の理解』〉

◆主査・主任向け

日程 平成30年10月23日（火）午後4時～午後5時

講師 財務・管理室 河合隆志主査

◆主事向け

日程 平成30年10月24日（水）午後4時～午後5時

講師 財務・管理室 大村雄三主任

平成30年度ハラスメント防止に関する教職員研修会の開催 ～大学・病院におけるハラスメントの実例から学ぶ～

ハラスメントの防止に係る啓発活動の一環として、平成30年9月14日（金）午後5時30分から大学本館302講義室において、公益財団法人21世紀職業財団の深海慶子氏を講師にお迎えし、ハラスメント防止に関する教職員研修会が開催され、75名の参加がありました。【写真】

今年度も、昨年度に引き続き、従来の講演会ではなく、教職員研修会（SD研修）として、ハラスメントの正しい理解を深めるとともに、ハラスメントのない明るい職場環境を作るための参考になることを目的として開催されました。

当日は、講演に先立ち、ハラスメント防止委員会委員長の鈴木孝太医学部学生部長からハラスメント防止の重要性についてあいさつがありました。講演では、座学に加え、実例に基づくケーススタディとして、異なる職種同士が、それぞれの立場で考え、意見交換することにより、充実した研修会が行われました。

また、研修会後のアンケートにおいても、研修会の評



価について約80%の方が「大変良かった」、「良かった」を選択しており、ケーススタディに対して好評な意見を得ているなか、「もっと参加者を増やすべき」との意見があることから、今後も参加者増員に向けての対策を検討していきたいと思えます。

中央臨床検査部 中山享之教授（特任）・部長 再生医療のFirst in human試験実施承認



中央臨床検査部の中山享之教授（特任）・部長【写真】が計画している「脂肪組織由来間葉系幹細胞を使用した臍帯血移植時における新規生着促進療法の安全性に関する臨床研究」が、平成30年9月21日付けで厚生科学審議会再生医療等評価部会による審査を経て実施承認が得られました。

この研究は、他家（他人）の脂肪組織由来間葉系ストローマ細胞（ADSC）を使用するため再生医療等安全性確保法における第一種再生医療等に区分されます。そのため再生医療等の提供計画を厚生労働大臣に提出することが義務化されています。また、本学独自のシーズであり、基礎研究から臨床応用へのトランスレーショナルリサーチです。また、First in human（ヒトに応用するのは世界で初めて）となります。

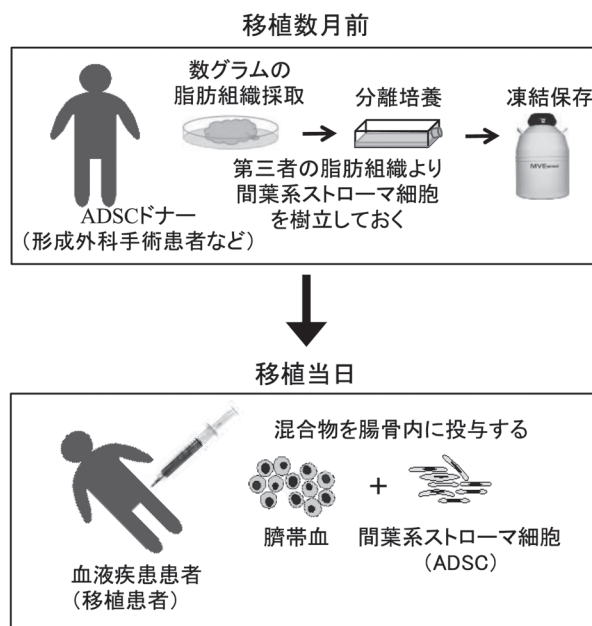
造血幹細胞移植の一つである臍帯血移植においては、ドナー負担がない、既に冷凍保存されているため迅速に活用できる、移植合併症の危険性が低いなどの利点があり、施行件数が近年増加しています。しかし、生着不全や生着遅延が他の移植法に比べて多く、感染の増加や輸血依存期間の延長が発生しており、これらはコストがかさむだけでなく、患者の精神的肉体的苦痛を増し、しいては生存率を下げる要因ともなります。そのため造血幹細胞数が少ない臍帯血は、生着不全や生着遅延が更に増す恐れから、利用されず貴重な細胞資源が無駄となっていました。つまり、これらの欠点を克服することは、世界的に喫緊の課題となっていました。

研究を担当する中山先生からは、「間葉系ストローマ細胞は、もともと骨髓内にあり造血をサポートしています。ですが、微量しか含まれておらず採取には侵襲を伴うので、それを樹立培養して臨床に応用するのは実際的ではありません。そこで我々は、間葉系ストローマ細胞を多量に含むとされる脂肪組織に注目して研究を進めました。予想外のことにADSCが骨髓由来のものに代替となるだけでなく、優れた造血支持能力を有することが判明しました（特許出願済）。それでADSCを臍帯血移植に併用すれば、造血組織の再生を促し生着不全と生着遅延を克服できると予想されます。脂肪組織は、美容整形などで採取・廃棄されており細胞資源としても豊富でドナー負担もありません。加えてADSCは、増殖が速いため、臨床に必要な量を調達するのも容易です。免疫抑制作用等の細胞活性も高く臍帯血移植の合併症を抑制する作用も見込まれます。大動物を用いたADSC投与試験においても、有害事象は認められず、ヒトに投与して

も安全性が担保できると判断されたため、この臨床試験を計画しました。ここに辿り着くまで紆余曲折がありましたが、たくさんの方のご助力により実施のスタートラインに立つことができました。感謝の気持ちでいっぱいです。安全性を確認する第I相試験から開始し、有効性を確認する第III相試験までの施行を予定していますが、気を引き締めて施行したいと考えています。試験が成功して、最終的に薬剤として上市できれば研究者冥利に尽きますね。造血不全を呈する他の病態（再生不良性貧血や化学療法後の骨髓疲弊など）にも応用していきたいと考えています。」との感想がありました。

研究のイメージ

脂肪組織由来間葉系ストローマ細胞（ADSC）を使った造血支持療法（概念図）



脂肪組織由来間葉系ストローマ細胞（ADSC）は、強力な造血支持能力を有する。その特性を活かし臍帯血移植に併用することにより生着不全を予防し、造血機能を早期に回復させることを目標とする。

用語説明

間葉系ストローマ細胞

中胚葉性組織（間葉）に由来する体性幹細胞。脂肪細胞や軟骨細胞への分化能をもつため再生医療への応用が期待されている。その他に、免疫抑制作用や造血支持能力を有する。採取する組織により特性が異なる。



第30回 日本医学会総会 2019 中部

医学と医療の深化と広がり ～健康長寿社会の実現をめざして～

学術集会

2019年4月27日(土)～4月29日(月・祝)

名古屋国際会議場、名古屋学院大学白鳥学舎、ウインクあいち

学術展示

2019年4月26日(金)～4月29日(月・祝)

名古屋国際会議場、ポートメッセなごや

会頭

齋藤 英彦
名古屋大学名誉教授

副会頭

松尾 清一 名古屋大学総長
郡 健二郎 名古屋市立大学長
駒田 美弘 三重大学長
星長 清隆 藤田医科大学長

柵木 充明 愛知県医師会長
森脇 久隆 岐阜大学長
今野 弘之 浜松医科大学長
佐藤 啓二 愛知医科大学長

準備
委員長

高橋 雅英 名古屋大学理事

事前参加登録

2019年4月5日(金)正午まで

参加登録区分 (区分は、登録時の身分とする)	事前参加登録 2018年2月1日(木)正午～2019年4月5日(金)正午まで	当日参加登録 2019年4月27日(土)～4月29日(月・祝)
医師・歯科医師・研究者	30,000円	35,000円

各種研修制度との連携

New

1. 日本専門医機構専門医共通講習

受講内容に応じて、下記の専門医共通講習の単位取得が可能です。

- ① 感染対策(必修)：2単位
- ② 医療安全(必修)：2単位
- ③ 医療倫理(必修)：2単位

2. 日医かかりつけ医機能研修制度応用研修単位

日本医学会総会に出席することにより応用研修の「関連する他の研修会」として2単位が付与されます。

3. 産業医・健康スポーツ医研修単位

事前申込のみ(定員制・先着順) (別途5,000円)

4. 日本医学会分科会(一部)の研修単位

分科会の認定する専門医制度等について、分科会規定に基づき単位取得が可能です。

5. 日本医師会生涯教育制度学習単位

受講内容に応じて日本医師会生涯教育制度の単位およびカリキュラムコードの取得が可能です。

事前参加登録完了後に産業医セッション受講申込専用サイトをご案内します

事前参加登録はこちらから ▶ <http://isoukai2019.jp/>



同時期開催

第116回日本内科学会総会・講演会

テーマ:新時代の内科学の創造 ～分化と統合、そして融合～

会長 **長谷川 好規**

名古屋大学大学院医学系研究科
病態内科学講座 呼吸器内科学 教授

2019年

4月26日(金)～4月28日(日)

ポートメッセなごや

「第30回日本医学会総会 2019 中部」参加により総合内科専門医認定更新単位：10単位、認定内科医認定更新単位：5単位が取得可能です。

主催：日本医学会

■主務機関：名古屋大学医学部、名古屋市立大学医学部、藤田医科大学、愛知医科大学、岐阜大学医学部、三重大学医学部、浜松医科大学、金沢大学医学部、金沢医科大学、福井大学医学部、富山大学医学部、信州大学医学部、愛知県医師会、岐阜県医師会、三重県医師会、静岡県医師会、石川県医師会、福井県医師会、富山県医師会、長野県医師会
■後援：日本医師会、日本学術会議、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省、愛知県、岐阜県、三重県、静岡県、石川県、福井県、富山県、長野県、名古屋市、(公財)名古屋観光コンベンションビューロー、(一社)中部経済連合会、名古屋商工会議所、朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞社、日本経済新聞社、産経新聞社、中日新聞社、NHK、CBCテレビ、東海テレビ放送株式会社、メーテレ、中京テレビ放送株式会社、テレビ愛知株式会社

(学会事務局より提供)

第22回へき地・離島救急医療学会in長崎大学において 医学部学生が地域枠学生シンポジウムで発表

平成30年10月27日（土）長崎大学で開催された「第22回へき地・離島救急医療学会」において、本学医学部学生2名が地域枠学生シンポジウムで発表しました。

一昨年の同学会において本学医学部の学生が「へき地医療の在り方について学ぶ～学生の立場から～」を発表したことをきっかけに、昨年からの地域枠学生を対象としたシンポジウムが企画されています。

今回は、医学部2学年次生の梶浦知尚さんが「地域枠学生として地域医療に携わることへの思いと不安～低学年の立場から～」、5学年次生の梶浦美佳さんが「地域枠学生として地域医療に携わることへの思いと不安～高学年の立場から～」と題した発表をしました。

今回学会に参加した梶浦美佳さんから「2年前は本学の地域枠学生として学会発表も初めてだったため、勝手がわかっておらず自分自身としては消化不良で終わりました。しかし、5学年次生として成長し自身の医学知識の向上も実感することができ、更に1人で発表することで次に繋がる自信になりました。学会への参加は、学生の今だからこそ学べることもあると考えます。大勢の地域医療のスペシャリストの方々とは直接顔を合わせて話しをすることは、実際に学会に参加しなければできない経験です。学会に2度参加することで地域医療を将来行うことに対してより前向きになり、将来の自分の描く医師像について考えることができました。是非後輩も後に続き、『地域医療を語る』ことのできる学生が増えたらと思います。」、梶浦知尚さんから「昨年に続いて、この学会に参加させて頂き、その準備段階に地域医療がそもそも何なのか、また地域医療がなぜ必要とされているのかについてとても深く考えるようになりました。学会に参加して他大学の学生の発表を聞くと、他県の地域枠学生の地域医療に対する意識の高さに驚きました。また、昨年は1学年次であったため、医学知識は解剖学の一部しか知らず、ほとんど学会の内容が分かりませんでした。今回は既に解剖学、生理学、生化学などの授業を受け、また、薬理学や病理学についても学んでいる段階であったため、他の先生方の学会での発表の内容が前回以上に分かるようになっていました。学会では様々なことを学んだため、先生方から伺った様々な意見をもとに来年や再来年も同様に発表をさせて頂けたらと感じました。」との感想がありました。



青木講師（左）と
学会会場前で記念撮影

前回の学会に引き続き、学生発表の機会づくりに尽力し、学生を引率・指導に当たった医学教育センターの青木瑠里講師から、「学生二人にとっては、ものすごく多くの収穫があったように思います。更に、地域研修システムが既に構築されている長崎県病院企業団・企業長の米倉正大先生、長崎県上五島病院・病院長の八坂貴宏先生、徳島県ホウエツ病院・理事長の林秀樹先生からは、研修の受け入れが可能という嬉しいお誘いを頂きました。今後は、学内調整を行い、地域枠学生を中心とした研修体制構築をしていくとともに、積極的に学びたいと意欲のある学生には、様々な機会を提供し続けていきたいと思っています。」と感想がありました。

学生らは、各地域で活躍される方々との交流を通して、全国のへき地医療の現状を知り、学びの多い機会になりました。

学生ボランティアサークルHIAMU 医療ケアを必要とする子どもと家族が楽しめるイベント 「第5回もーやっこジュニアの広場」に参加

平成30年10月6日（土）瀬戸蔵（瀬戸市）において、瀬戸市・尾張旭市近郊の医療ケアを必要とする子どもと家族が楽しめるイベント「第5回もーやっこジュニアの広場」が開催され、本学の学生ボランティアサークルHIAMUが参加しました。【写真】

このイベントは、瀬戸旭医師会を始め、瀬戸市の終訪問看護ステーション、本学の学生ボランティアサークルHIAMUが中心となって、普段外出が難しい医療が必要な子どもたちやその家族と一緒に楽しみを分かち合える場を作り、小児の在宅医療ケアを学ぶ機会を設けることを目的としてスタートし、今回で5回目の開催となりました。

本学からは、在宅看護学の佐々木裕子准教授を始め、HIAMUの学生が運営スタッフとして参加しました。子どもたちやその家族が安心して楽しんでもらうことができるように意見やアイデアを出し合い、イベントの準備を進めてきました。

今回は、子どもたちや兄弟が楽しめる魚釣りゲーム、当日撮影した記念写真を飾るフレーム作り、手探りゲーム、小麦粉粘土のブースなどのイベントを学生が中心となって運営しました。

HIAMUの代表を務める医学部4学年次生の古屋佑夏さんから「子どもたちが楽しそうに遊んでいるのを見たり、医療ケアが必要な子が小麦粉粘土の感触に驚いた表情を見せてくれたりするととても嬉しく、準備してきて良かったと心から思いました。こういった機会を与えて



頂ける環境に感謝しつつ、来年もぜひ参加し、より良いイベントを作っていきたいと決意を新たにしました。」と感想がありました。

平成30年度国立研究開発法人日本医療研究開発機構委託研究開発契約の締結

平成30年度国立研究開発法人日本医療研究開発機構委託研究開発課題が採択され、次のとおり研究開発契約を締結しました。

（金額単位：円）

研究事業名	研究開発担当者	委託研究開発費	研究開発課題名
感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 B型肝炎創薬実用化等研究事業	伊藤清顕 医学部 内科学(肝胆臓内科), 教授(特任)	9,500,000	胆汁酸代謝調節機構を標的としたB型肝炎ウイルス制御
革新的先端研究開発支援事業ユニットタイプ「生体恒常性維持・変容・破綻機構のネットワークの理解に基づく最適医療実現のための技術創出」研究開発領域	伊藤恭彦 医学部 内科学(腎臓・リウマチ膠原病内科), 教授	3,900,000	生体内の異物・不要物排除機構の解明とその制御による疾患治療
長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業 (感覚器障害分野)	内田育恵 医学部 耳鼻咽喉科学, 准教授(特任)	4,497,774	プロダクティブ・エイジング(生産的高齢化)社会の実現に向けた難聴者への補聴介入-遂行機能と社会活動性に注目した検討
難治性疾患実用化研究事業	岡田洋平 医学部 内科学(神経内科), 准教授(特任)	27,690,000	疾患特異的iPS細胞を用いた球脊髄性筋萎縮症の新規治療薬シーズの探索
難治性疾患実用化研究事業	奥村彰久 医学部 小児科学, 教授	8,320,000	早産児核黄疸の包括的診療ガイドラインの作成
感染症実用化研究事業 新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業	森島恒雄 客員 教授	14,100,000	ウイルス性重症呼吸器感染症に係る診断・治療法の研究
脳科学研究戦略推進プログラム	吉田真理 加齢医学研究所 教授	13,300,000	名古屋地区の神経疾患拠点の構築

- ・平成30年9月までの本学と日本医療研究開発機構との直接契約課題を記載（変更契約を含む）。
- ・委託研究開発費は、他機関への再委託費及び間接経費を含む。

学 術 振 興

学 位 授 与

◆大学院医学研究科



塩見 有佳子

学位授与番号 乙第391号

学位授与年月日 平成30年9月13日

論文題目：「Clinical significance of circulating tumor cells (CTCs) with respect to optimal cut-off value and tumor markers in advanced/metastatic breast cancer(進行・転移性乳癌における循環血がん細胞 (CTC) の至適カットオフ値と腫瘍マーカーとしての臨床的意義)」



丹羽 愛知

学位授与番号 乙第392号

学位授与年月日 平成30年10月11日

論文題目：「Interleukin-6, MCP-1, IP-10, and MIG are sequentially expressed in cerebrospinal fluid after subarachnoid hemorrhage (くも膜下出血後の脳脊髄液におけるIL-6, MCP-1, IP-10, MIGの経時的発現)」

◆大学院看護学研究科



竹島 雅子

学位授与番号 第108号

学位授与年月日 平成30年9月27日

論文題目：「非侵襲的陽圧喚起療法を受ける早産児のデバイス関連ケアと感染予防ケアの実態調査」

研究助成等採択者

○公益財団法人武田科学振興財団

2018年度医学系研究助成（精神・神経・脳領域）

●氏名 依田真由子（内科学講座(神経内科)・特別研究助教）

研究題目 変異アンドロゲン受容体の標的分子から迫る，疾患iPS細胞を用いた球脊髄性筋萎縮症の病態解明

助成金額 2,000,000円

○公益財団法人武田科学振興財団

2018年度医学系研究助成（感染領域）

●氏名 山崎達也（感染・免疫学講座・助教）

研究題目 抗体遺伝子を応用した新規ワクチン療法の開発

助成金額 2,000,000円

○公益財団法人豊秋奨学会

平成30年度研究費助成

●氏名 高村祥子（感染・免疫学講座・教授）

研究題目 脂質会合分子を標的とした敗血症性免疫麻痺の治療戦略

助成金額 1,400,000円

○公益財団法人大幸財団

平成30年度（第28回）自然科学系学術研究助成

●氏名 池上啓介（生理学講座・助教）

研究題目 眼圧の概日リズムを制御するメカニズムの解明

助成金額 4,000,000円

○公益財団法人大幸財団

平成30年度（第7回）人文・社会科学系学術研究助成

●氏名 松永昌宏（衛生学講座・講師）

研究題目 社会的感情・態度に対する社会・文化環境と遺伝子の相互作用の解明

助成金額 800,000円

○公益財団法人日東学術振興財団

第35回（2018年度）研究助成

●氏名 池上啓介（生理学講座・助教）

研究題目 概日履歴現象異常モデルマウスを用いた履歴効果の仕組みの解明

助成金額 1,000,000円

○公益財団法人日東学術振興財団

第35回（2018年度）研究助成

●氏名 梅村朋弘（衛生学講座・講師）

研究題目 南アジアベンガル地域における大気汚染一顧みられない地域の実態とその健康影響

助成金額 1,000,000円

○公益財団法人大幸財団

第35回学会等開催助成

●氏名 高安正和（脳神経外科学講座・教授）

学会名称 第53回日本脊髄障害医学会

助成金額 200,000円

○公益財団法人日本糖尿病財団

平成30年度研究助成金

●氏名 姫野龍仁（内科学講座（糖尿病内科）・講師）

研究題目 糖尿病性多発神経障害におけるinsulin-Notch連関を介した再生機構の意義

助成金額 1,000,000円

本学講座等の主催による学会等

【学会名】

- ・第28回愛知眼科フォーラム
- ・第20回日本神経消化器病学会

【開催日】

平成30年9月2日(日)
平成30年10月5日(金)・6日(土)

【会長等】

瓶井 資弘
春日井邦夫

第28回愛知眼科フォーラム

眼科学講座・教授 瓶井 資弘

愛知眼科フォーラムは、本学眼科学講座が主催し、一般眼科医、視能訓練士に公開している眼科全般の学会です。毎年1回開催しており、本年度は第28回大会を、平成30年9月2日(日)興和株式会社本社ビル(名古屋市中区栄)において開催しました。

当日は計83名が参加され、特別講演は、山根真先生(横浜市立大学附属市民総合医療センター)、小椋祐一郎先生(名古屋市立大学大学院医学研究科眼科学教室教授)の2名をお招きして、それぞれ「手術教育と自身の成長」と「糖尿病黄斑浮腫治療のパラダイムシフト～過去から未来に向けて～」と題した講演が行われました。また、本学眼科学講座と関連病院から19題の一般演題の発表があり、いずれも高度な眼科医療、高い水準の研究を示すもので、活発な質疑応答が行われ盛会のうちに終了する



ことができました。

最後に、本学会を開催するに際しまして、ご協力頂きました本学関係者の皆様に心より御礼を申し上げます。

第20回日本神経消化器病学会

内科学講座(消化管内科)・教授 春日井 邦夫

本学会は消化器系の機能性及び器質性疾患を脳・神経—消化器の機能相関の観点から解析し、複雑な消化器疾患病態の解明・治療に役立てることを目的として設立されました。

平成30年10月5日(金)、6日(土)の2日間ウイークあいちにて第20回という節目の学会を開催させて頂きました。パネルディスカッション、スポンサードシンポジウム、一般演題に加え、並木賞候補演題、ランチョンセミナー、イブニングセミナーから構成され、早朝から多くの先生方にご参加頂き活発な議論が行われました。また、特別講演では愛知県の新進気鋭のメーカーである株式会社エアウィーヴ会長の高岡本州氏に「寝具による睡眠の質の向上と医療への可能性」と題した特別講演を賜りました。睡眠研究で医学に貢献するという夢のあるお話で、会場は立ち見も出るほどの大盛況でした。また、高岡氏のご好意で参加者にはエアウィーヴが配布され、みなさん大変満足されていました。近年、神経消化器の



領域は大変注目されており、今後ますます発展していくと思われまます。

末筆となりましたが、本学会の開催に当たり多大なるご支援とご協力を賜りました、一般財団法人愛知医科大学愛恵会、消化管内科同門会春水会並びに関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

海外研修派遣研修記

本学では、教育、研究活動等の向上に寄与するため、教員の海外研修派遣を実施しています。この度、本院血液内科の水野昌平助教が海外研修へ参加されましたので、その研修記をご紹介します。

水野昌平

(血液内科・助教)

研修課題：再発・難治多発性骨髄腫におけるMAGEの腫瘍増殖や薬剤耐性の機序解明と精密治療法（MAGE-A阻害薬）の開発

研修先：マウントサイナイ医科大学（米国）

研修期間：平成29年10月1日～平成30年9月30日

私はこの度、本学の海外研修派遣制度により、ニューヨークにあるIcahn School of Medicine at Mount Sinai（マウントサイナイ医科大学）に1年間の留学する機会を頂きました。マウントサイナイ医科大学は、1852年にユダヤ人の病院と設立され、1963年に医科大学となりました。マンハッタンのアッパーイーストにあり、セントラルパークがすぐ横にあります。マンハッタンの中ではとても落ち着いた場所がありますが、想像以上に長久手とは比較にならないくらい物価が高いところでもあります。

私が今回留学することになったのは、大学院の研究を指導して頂いた花村一朗先生のアーカンソー大学時代のボスであったBart Barlogie教授が、平成28年3月に愛知医科大学に講演に来て頂いたことがきっかけで、その際に留学したい意思を伝えたことから始まりました。

Barlogie教授は、多発性骨髄腫の自家造血細胞移植を確立した著名な先生であり、私の研究内容から同僚であるHearn Jay Cho先生を紹介して頂きました。その後、メール交換を繰り返しておりましたが、実際はなかなか進みませんでした。しかしながら、同年12月にアメリカ血液学会の際に、Dr. Cho研究室を見学させて頂き、直接お話をさせて頂いた後に大きく進展していきました。

現地では、まずは言葉の壁があり、単語をなんとか拾いながら想像し、不安なことはメールで確認をしながら、なんとか研究を進めました。また、マウントサイナイ医科大学には、少なくとも50人以上の日本人がいたので、多くの方々に日常生活などを助けて頂きました。多くの交流の中で、妻や子供も楽しく安全な生活を送ることができたので、私も安心して研究に取り込むことができました。

研究室では、骨髄腫におけるMAGE-A3の役割の解明について私も携わることとなりました。主にマウスを使用した骨髄腫に対するワクチン療法の開発、骨髄腫細胞株を使いMAGE-A3の薬剤耐性や難治性をもたらす機序についての解明を行っていました。私は後者のグループに入り、更に骨髄腫は形質細胞の腫瘍であるため、形質細胞の前駆細胞であるB細胞におけるMAGE-A3発現による影響を解明することに取り組むこととなりました。



Dr. Cho研究室のメンバーと（筆者：右奥）



セントラルパーク（研究室の窓から）

始めの数か月は、研究所助手にCho研究室の機器や実験室の使い方など学びながら研究の手伝いを行いました。実際、私のメイン研究は、試薬の準備などが整った平成30年1月からで、レンチウイルスベクターを使いMAGE-A3をB細胞リンパ腫細胞株に遺伝子導入することを開始しました。MAGE-A3レンチウイルス産生までは順調に進みましたが、実際に導入する細胞株のコンタミやサイトメガロ感染など様々な問題が起きました。また、そこをクリアした後もB細胞リンパ腫細胞株にはレンチウイルスでの遺伝子導入効率が非常に低く、導入は困難でした。私が関わる事ができた骨髄腫細胞株を使用した実験系では、MAGE-A3をレンチウイルスshRNAにてノックダウンを行い、アポトーシスの低下や細胞増殖を認め、その機序も解明しつつあります。

最後に、このような貴重な機会を与えて下さいました高見昭良教授、花村教授（特任）及び血液内科の医局員の皆さま、サポートして頂いた庶務課の皆さまにこの場を借りて心より感謝申し上げます。

～大学・病院を支える笑顔豊かなスタッフ陣～

「Smile ～スマイル～」では、大学・病院で活躍する職員の笑顔にスポットライトを当てて、各部署における活動内容や取組みなどについて紹介いたします。

看護学部 母性看護学領域

母性看護学領域は、助産師である3名の教員が周産期を中心としたリプロダクティブヘルスを高める看護の教育・研究を行っています。

少子化が進み、出産は日常生活の中で身近ではなくなっています。これは、子どもが生まれるカップルはもちろん、看護学生にとっても同様で、不安や期待、そしてリアリティ・ショックがあります。出産にのぞむ母親やご家族の想い、育児の大変さ、新生児の生命力を講義・演習・実習で学ぶことで、母性看護を理解するだけでなく、自分が生まれたときの親の気持ちを振り返ったり、将来子どもを育てることについて考える機会となっています。

『子どもとご家族にとってより良い社会になるように』

母性看護が目指すところはウェルネスな看護です。母親が自信を持って楽しく育児ができるよう、ご家族や社会が母子を温かく見守るシステムを追求することを心がけています。



研究は、各教員が助産師の専門性を活かしたテーマに取り組んでいます。また、愛知医科大学病院の産科病棟やこころのケアセンターのスタッフを始め、近隣施設の看護師や助産師、保健師、研究者など多職種連携を基盤とした「子育て家族のこころを支える研究会」を主宰し、定期的な勉強会や症例検討会を行っています。

子育て家族のこころを支える研究会ホームページ：
<http://kosodate-kazoku.jp/>

睡眠医療センター

睡眠医療センターは、本院中央診療部門に属し、2000年に誕生して以来、睡眠時無呼吸症候群（SAS）を中心に、過眠症、ナルコレプシー、不眠症、むずむず脚症候群、レム睡眠行動障害、概日リズム睡眠覚醒障害等の疾患の検査・診断を主に行い、日本睡眠学会専門医療機関A型に認定されています。

本センターは、中央棟7B病棟に併設され、病棟の個室7床を検査用としています。ここでは、終夜睡眠ポリグラフ検査（PSG）や反復睡眠潜時検査（MSLT）などを実施しています。PSGは、脳波、眼球運動及び頤筋筋電図を基本とし、呼吸、心電図、酸素飽和度、いびき、前脛骨筋筋電図、体位などの生体現象を同時記録することにより、終夜における睡眠深度、その経過や睡眠中の呼吸及び循環の生理現象を総合的に評価する検査です。MSLTは、ナルコレプシーの診断のため、外界からの覚醒に繋がる要因を除いた上で、眠りに就く能力・眠りやすさを客観的に評価する検査です。

また、中央棟3階の睡眠科外来では、SASの標準的治



療法である経鼻的持続陽圧呼吸（CPAP）療法の装置管理、CPAPの使用データ解析、患者さんにはCPAP装置の使用について指導を行っています。他には、PSGやMSLTの予約が入った患者さんに対して、検査説明を行い不安なく検査を受けてもらえるように努めています。

私たち睡眠医療センタースタッフは、日本睡眠学会認定検査技師の認定資格を有し、睡眠科医師とともにあらゆる睡眠障害の診療を行えるようにスタッフ一同が昼夜を問わずに頑張っています。

“人を残すは上なり”— 学究の徒を育み、糖尿病学に曙光をもたらす—

内科学講座（糖尿病内科）・教授 中村 二郎

【医学教育のグローバルスタンダードを目指して】

教育学研究では、研究者が立てた理論の実証実験として実際の教育現場を使うため、本学を含む高等教育機関の学生にとっては、貴重な一度きり教育の機会が常に実験に使われることとなります。そのため、経験に培われた教育法を土台に据えることで教育の致命的な失敗を予防しつつ、漸次、新たな教育法を試していくという方法をとっております。

実際には、糖尿病学の講義においては、従来の座学を中心とし、そこに学生が主体となるいわゆる“アクティブラーニング”形式を一部に導入しております。実習においては、個々の症例における糖尿病の病態を的確に把握する従来型訓練と社会的背景を考慮した全人的医療の実践を並行して指導しています。また、担当医としてのプレゼンテーションを経験することにも多くの指導時間を割いております。

本邦では、知識偏重型教育の弊害が指摘されている一方で、“ゆとり教育”の結果、文化活動の停滞・思考の画一化・思想の貧困化が生じている事実があります。“学びて思わざれば則ち罔し（くらし）、思いて学ばざれば則ち殆し（あやうし）”（学ぶだけで思考しなければ知識を生かせず、思考するばかりで知識を学ばなければ賢明な判断ができない）という警句を胸に、糖尿病内科では、正しい医学知識を効率的に提供することを通じつつ、情報の吟味の仕方、正しい知識を獲得する方法等を学生に伝えています。この教育法により、生涯にわたり、いかなる状況におかれても、具眼の士として独立不羈を誇れる医師・医学者を育てることを目指しています。

【世界に発信する医学研究】

糖尿病内科では、糖尿病性合併症とりわけ糖尿病性神経障害をメインテーマとして臨床研究と基礎研究の双方を行っています。

糖尿病性神経障害は、診断基準・重症度分類が確立さ

れておらず、臨床現場で混乱が続いています。そこで当研究室では、診断基準・重症度分類を策定するための多施設共同研究を行っています。角膜共焦点顕微鏡や簡易神経伝導検査などの簡便で客観性に優れた検査を用い、汎用性のある基準の策定を目指しております。

糖尿病性神経障害は治療法も未確立であることより、基礎研究では、病態の解明と治療法の開発を目指した複数の研究を行っています。神経幹細胞の維持機構破綻モデル、各種神経ペプチド欠損モデル、タンパク翻訳後修飾異常モデルなどの遺伝子改変マウスを用いて、本学出身の大学院生を中心に、日々研究に勤しんでおります。また、基礎研究のもう一つのメインテーマとして、膵β細胞のバイオロジー探求に取り組んでおります。その中では、膵島移植療法の改善、組織幹細胞からの膵β細胞作出などの意欲的なテーマにも挑戦してもらっています。

“霧の中を行けば覚えざるに衣湿る”（霧の中を歩いていくと、知らないうちに衣が湿っている。善い人に近くと知らないうちに善い人になる。）の精神の下、自主性を重んじた研究生の中で自ずと学ぶことを通じて、その後の人生における規範となる思考法を身につけて頂ければと考えています。

【講座からの一言】

糖尿病学は、医学のみならず看護学・栄養学・行動学・医療経済学・地域医療学などの諸学問の占める比重が高い学問分野です。糖尿病は、人間が普通に人間味のある生き方をする上で生じてくる病気であり、医学知識のみを用いて対峙することはできず、様々な視点から病気と病人を俯瞰することが必要とされます。高踏的に過ぎず、世俗的な泥臭さでもって、多くの方の力を合わせて向き合うことが大事な病気ですので、今後とも同門、同窓、諸先輩方、地域の方々のご協力・ご指導を仰いで参りたいと考えております。



医局員一同（於 平成30年同門会総会）



動物実験部門での実験風景

規 則

規則の制定・改廃情報をお知らせします。

医療法等の改正に伴う規則の改正等

医療法及び医療法施行規則の改正に伴い、病院長の選考方法を変更し、病院長の権限を明確化し、及び、病院の業務の監督体制等を定めるため、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも平成30年9月25日

【全部改正】

- ・愛知医科大学病院長任用規程

【一部改正】

- ・愛知医科大学病院副院長規程
- ・理事会の運営方針
- ・学校法人愛知医科大学事務組織規程
- ・学校法人愛知医科大学内部監査規程
- ・学校法人愛知医科大学内部監査規程施行細則
- ・法人の経理に関する権限の委任及び専決の取扱基準

【廃止】

- ・愛知医科大学病院長候補者選考規程

消防計画の全部改正

学校法人愛知医科大学消防計画の全部が改正され、政府の「警戒宣言凍結」に伴う規定の整理がされ、災害復旧対策、帰宅困難者対策、テロ等毒性物質への対策等に関する事項が定められました。

施行日は平成30年10月1日

看護師特定行為管理規程の一部改正

愛知医科大学病院看護師特定行為管理規程の一部が改正され、看護師の特定行為に係る業務の実施手順が改められました。

施行日は平成30年10月1日

インフォームド・コンセントの適切な実施に関する規程の一部改正

インフォームド・コンセントの適切な実施に関する規程の一部が改正され、インフォームド・コンセントを行う際の説明内容が改められました。

施行日は平成30年8月1日

がん診療連携拠点病院準備委員会要綱の制定

がん診療連携拠点病院準備委員会要綱が制定され、がん診療連携拠点病院の指定にかかわる事項を審議するための委員会の組織、運営等が定められました。

施行日は平成30年9月1日

「医学部事務部事務分掌について」の一部改正

平成30年9月1日付けで「医学部事務部事務分掌について」（法人本部長・事務局長裁定）の一部が改正され、「大学院医学研究科に関すること。」が庶務課から教務課に移管されました。